

ガーデンアイランド北海道 in きよさとフォーラム

花と緑と交流のまちづくりを全道に発信

8月5日(土)・6日(日)の両日、清里町を会場に「ガーデンアイランド北海道 in きよさとフォーラム」が開催されました。

このフォーラムは、「美しい庭園の島」(ガーデンアイランド)北海道の実現をめざして2008年に全道規模の花と緑のテーマイベントを開催しようとして計画している「ガーデンアイランド北海道2008を実現する会」との共催で実施したものです。

フォーラムは2003年より帯広、函館、旭川など全道各地をリレーで開催しており、清里町での開催は6回目。バスツアーや実技講習、講演など2日間にわたるフォーラムには町内外から延べ約500名の皆さんが参加しました。



基調講演

「今、この国はローカル(田舎)が面白い」

鈴木輝隆さん(江戸川大学教授)

これまでの地域づくりの90%は行政が主体でした。これからは多様な主体ということが大切であり、一人ひとりの力に負うところが大きくなって既存の組織の役割は小さくなっていきます。シニア世代のサークルや企業などが地域づくりの担い手になって欲しいという期待が高まっています。行政が中心ではなく、それぞれが対等の立場にたつて地域経営をしていく時代がきています。

ローカルデザインとは、暮らしを豊かにする人々の自然観や、そこでの創意工夫、格闘など個性の凝縮にあります。地域を元気にするということは、実はそういう清里の精神、清里のデザインをどうつくっていくかということです。

これからは、「地域の交流」から「地域への貢献」が重要となります。コミュニティケーションするだけではなく貢献をしていく、そのための住民パワーを生かしていく地域づくりのシステムが大切で、最初の産婆役として行政の役割が期待されます。

地域の力とは、経済(お金)、人的資源(人材)、社会関係資本(人間関係)、それから文化資本、環境資本。なかでもこれからは社会関係資本が大事で、共に助け合っていない地域には地域力が生まれません。

そのためには、少数点以下の発想が必要です。1と2の間には無限の数値があり、一人ひとりが小さな出来事から始まるという発想、その集積が重要でそこに創造的なことが生まれます。

パネルディスカッション

「美しい北海道の農村、人、自然。」

私たちが守るもの、つくるもの」

内倉真裕美さん(ガーデンアイランド北海道2008を実現する会)



「デザイン性があつてはじめて、素敵に見える価値が生まれます。そのような花のまちづくりが必要です。宿根草などを増やして地域性をだしていくことが必要です。」

小俣 寛さん(はまなす財団主任研究員)



「景観とは人の営みの結果であるとする地理学者が言っていますが、営みの質が高くなれば、質の高い風景が生まれるといふことです。ヨーロッパでは食料を自給できなかった時代、防風林をどんどん切ってしまった経緯があり、今、社会の価値が変わり後悔している。清里はヨーロッパ並みの規模のなか、防風林や斜里川の自然を保全しつつ大規模農業を展開し、人間的な親しみやすい景観になっている。」

川筋 守さん(NPO法人きよさと観光協会会長)



「18歳まで清里で育ち、20年後、清里に戻ってきた。子ども頃の景観とくらべると、屋敷の周りが違ったり畑の形も昔から随分変わったが、そこに住む人の生き様や心根は同じ。」



【取組紹介】

恵庭市の内倉真裕美さんからは「ガーデンアイランド北海道2008」の実現に向けた構想や計画が紹介されました。



【取組紹介】

清里町からは三上政夫さん（花と緑と交流のまちづくり委員会委員長）と佐藤昇さん（上斜里フラワーロード推進協議会代表）のお二人が登壇し、それぞれの活動の内容を紹介しました。



【実行委員長挨拶】

橋場町長が歓迎の挨拶とガーデンアイランド北海道の実現を呼びかけました。



【きよさと景観・花めぐりバスツアー】

約50名が参加者し、清里町の景観スポットやオープンガーデンを巡りました。



【ガーデニング技術講習会】

月形町コテージガーデン代表の梅木あゆみさんの指導で、ハンギングバスケットを使った寄せ植え技術を学びました。



【参加者交流会】

屋外でのバーベキューを囲んでの交流会には、町内外より約60名が参加。講師の先生方も参加し、日頃の活動状況の情報交換を行いました。

「きよ」と歌っています。鉄道ができて外との繋がりも生まれてくる。その喜びと、自分たちの農業を中心とした町の美しさを歌いあげたものだと思います。この歴史が清里町の資産です。探していけば、まだまだこの町には眠っているものがあると思います。そのなかから、自分たちの地域づくりの活路を見出して欲しい。素朴で健康な美、にじみ出てくるような美しさのある農村を長い時間をかけてつくっていただきたい。そうすることで、次の世代、その次の世代に素晴らしい種を残すことができると思います。」



小林昭裕さん（コーディネーター、専修大学北海道短期大学教授）

「清里町の小学校の副読本を送っていただきました。鉄道が通った70年前の子どもの詩が載っています。列車が走る、どこまでも、森越え、野を越え、丘を越えて、じゃがいもの花、亜麻の花、麦の穂波に風欲し



奥山英明さん（清里町花と緑と交流のまちづくり委員会事務局長）

「清里の花と緑と交流のまちづくり活動は多くの町民の参加と協働に支えられている。今後も、地域の経済産業の振興発展と自然や景観保全が共存・共生できるかが重要。清里町の自然景観を守りながら、新たなコミュニティビジネスを生み出したい。」

そして今、子どもたちにこの様な清里の良さを伝えていきたい。」